

日本医史学会平成29年11月例会

シンポジウム：わたしはなぜ医学史・医療史をまなぶのか

1. わたしはなぜ医学史・医療史をまなぶのか

岡田 靖雄

青柿舎（精神科医療史資料室）

平成29年11月25日は上記名称のシンポジウムにあてられた。それぞれ分野をことにする岡田、月澤美代子、渡部幹夫、逢見憲一の諸氏に、医学史、医療史をこころざした初心、その後の歩み、また、自分にとって医学史、医療史はどういう意味をもっているか、などの点をザックバラにはなしていただいた。ねらったのは、医学史とはなにかとといった、形式ばった教科書的な話ではなくて、それぞれの個人的体験にもとづいて、歴史研究は得か損かといったホンネまでかたっていたら、参会者を刺激し、多くの方に討論に参加していただくことであった。そこで報告者には割り当ての25分を厳守していただいたので、それぞれにかたりたりぬところがのこったことだろう。

じつは、日本医史学会創立90周年の例会は3月25日におこなったのであるが、日本医史学会の創立は90年前の11月4日なので、その11月にそれぞれの研究の出発点をかたっていたことには、かなりの意味もあったのである。

報告内容は各報告者の抄録をよんでいただければよいが、あとの討論からいくつかの点をかきとめておきたい。ちゃんとした記録はとっていないので、いまわたしの記憶にのこっている（あるいは記憶からのちに発展した）点だけであることをお断りしておかななくてはならない。

文献としてあるいは遺物としてのこの資料がなくて、聞き取りによっていなくなてならぬ領域もおおい。文献がのこっている領域でも、聞き取りによって記述をゆたかにし色どりをそえることができる。

科学史学会をみると、それぞれの人が中年ぐらになって自分の職業的専門分野などからその歴史の研究にはいっていくことがおおかったのに、今は学部時代から歴史の方向に専門化している人がふえているようで、学問的緻密さはかたいが、研究に面白さ・ふくらみにかける。日本医史学会でもた傾向はないだろうか（医師のしめる割合がへってきているのはたしかかなようだ）。

横につなぐ研究が必要である。たとえば、1969年のライシャワ大使刺傷事件は、1950年神衛生法制定以来の精神衛生行政のあり方がとわれるものであった。同時に、輸血によって大使は肝炎に感染して刺傷そのものよりはこちらがより重症となったことにより、日本の売血制度がとわれた。こういう共時的な出来事に目をむけることが大事である。さらには、個別的でなくて世界史的な見方も要求される。

逢見氏報告に関連しては、衛生法の範囲が討論された。どうも衛生学、公衆衛生学（さらには、かつての社会衛生学）の対象範囲は、時代により、大学により、またそのときどきの教授によって、かなりちがうようである。

岡田の資料が羽仁五郎の名をあげていたことについて質問があった。企画・編集に関与した『都市の論理』はベストセラーとなり、羽仁は時代のいわばアイドルとなった。その後のかれの言行をみると、他を攻撃するとおなじ鋭さをもって自分を律することがない。その点、闘争のなかで自分の周囲にいた精神科のわかい医者たちに共通していた（だから羽仁は時代のアイドルスターになった）、というのが答えである（戦後史においてか

れがはたした役割りはふかく再検討していく必要があるだろう)。

1時間ちかい討論は、医学史は現代の問題から出発している、年とともに医学のあり方はかわってきているし、それぞれの時代からみた医学史が必要だ、といった趣旨の坂井建雄理事長のことばでしめくくられた。

ふりかえると、この日は報告および討論は丸一日かけてもおさまりきれないものをもっていた。学会発表にしても、できあがった成果を報告するだけでなく、仕事の出発点・歩み、そのなかでの問題点についてもはなしあうことが、研究の発展をうながすのだらうと、このシンポジウムを企画したものとして感じた次第である。